Profile No.2

真のプロフェッショナルとなる素晴らしき哉 プロフェッショナル人生！

上野紘志

上野　紘志

うえの　ひろし

昭和42年　早稲田大学大学院商学研究科修士課程修了
昭和44年　公認会計士登録
昭和57年　監査法人中央会計事務所代表社員
平成12年　中央青山監査法人理事長（～平成17年）
平成23年　長野県監査委員（～平成27年）
現在、税理士法人上野会計事務所特別顧問

先生が公認会計士を勉強されるようになったきっかけと今にいたるまでの軌跡を教えてください。

明治39年祖父が松本に簿記学校を作り、経営しながら明治41年に会計事務所を始め、それ以来地元の会計を担っていました。その後父が昭和24年の第1回の公認会計士試験に合格し、日本における公認会計士の草分けとなりその仕事を引き継ぎました。

私は早稲田大学政経学部に在籍しており、就職しようと考えましたが、父と同じく公認会計士になろうと決めました。昭和40年に公認会計士試験に合格すると、村山徳五郎事務所に入所し、昭和43年に中央会計事務所という監査法人でスタッフとして働きはじめました。

その後中央会計事務所のパートナーとなりましたが、昭和49年に父が急逝したため、松本へ帰り、父のやっていた証券取引法監査の仕事も引き継いで始めました。東京のクライアントもあり、松本と東京を行き来し、一生懸命働きました。ちょうどその頃商法監査がはじまり、監査を個人でやる時代ではなくなってきました。そこで、私は昭和57年に、中央会計事務所に代表社員として再加入し、監査業務を主体にずっとやってきました。世の中で監査というものの責任も大きくなり、クライアントの国際化やITの技術の進歩など、取り囲む環境が変わりました。そのうちに中央会計事務所がクーパース・ライブラントのインターナショナルネットワークの中のエグゼクティブ・コミッティという最高意思決定機関のメンバーとなり、様々な経緯を経て平成10年にプライス・ウォーターハウスとクーパース・ライブラントが合併し、PwCが誕生しました。同時期に中央監査法人と青山監査法人が合併することとなり、私が合併の責任者となりました。

合併した後中央青山監査法人の理事長になり、それから5年間は監査と監査法人理事長職務に集中し、松本のほうは地元の税理士さんに仕事をしていただきました。そして平成17年に理事長を退任し、地元に帰ってきました。

これまでの60年間の公認会計士人生の中で特に印象に残ったことを教えてください。

日本の企業が次々に海外に進出し、日本経済が高度成長期を経て様変わりしていく中での公認会計士の果たす役割が大きくなってきたことを感じました。

海外の日系ビジネスに対してどのようにサービスするかということになり、クーパース・ライブラントといった海外の事務所とどのように連携をしていくかなど折衝のためなどで頻繁に海外へ行きました。ロンドンやニューヨークに現地2泊というような出張もよくしました。

海外で交渉にあたり英語でのコミュニケーション方法など気を付けていたことはありましたか。

とてもハードな交渉だったので、日本のメンバーファームが国際社会でいかに立場を主張できるかということについては本当に苦労しました。ニューヨークで先方のトップと会合し最後の最後にやっと交渉がまとまったということがあり、その際にはトップクラスの通訳も同伴の上交渉をしました。

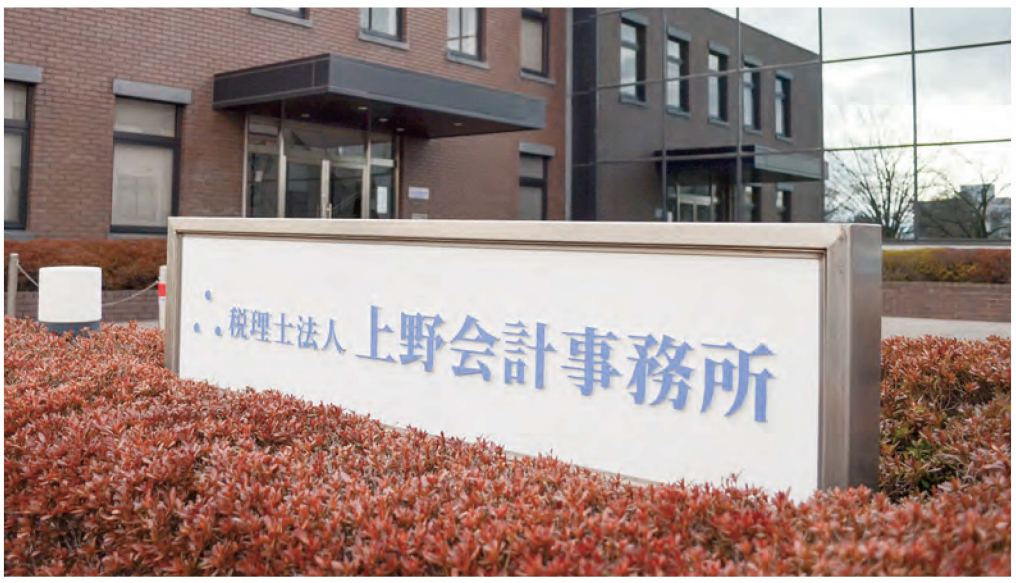
先生は地域に根ざした形で会計士事務所を経営されていますが、どのようなことを意識されていますか。また税理士との差別化はどのように図っていかれてますでしょうか。

まず、会計基準等を勉強して、監査をしっかりと行っていれば、税理士との差別化はできますし、地域でもそういう公認会計士として身に付けた知識は必ず役立ちます。基盤となるのは、いろいろな勉強をして、公認会計士になったら会計基準、監査というものを通じて企業を見る、それから数字を見るということを身に付け、例え小さな企業であっても大企業のガバナンスや会計処理基準の仕方などを勉強してあれば、そういう知識が必ず地域の中小企業にも役立つし、地域の公共的な機関にも役立つということなのです。そういう意味で、公認会計士になったからには会計と監査というものをベースにきちんとやれば必ずそれは結果としてそうなります。公益法人などの監事や会社の監査役、地元自治体の監査委員など、公認会計士はどんな歳になっても様々な仕事の依頼を受けます。これも長年監査をしたおかげです。一番大事だと思うのは、プロフェッショナルということです。プロフェッショナルというのは、まず人間としての誠実であること、信頼感を得ることです。信頼を得る人間であることがプロフェッショナルの原点だと思います。プロフェッショナルである以上、高度で専門的な知識と技能、この二つがあって、その上に独立性と守秘義務があること、人間としての独立性と守秘義務の保持が公認会計士としての基本的な条件です。同時にそういうプロフェッショナルとして信頼を得て仕事をするということはあらゆることを相談されたり見たりする立場になります。そうすると必然的に他人からいろいろなことを相談されたり答えたりするときに、そういう誠実な、真面目に答えていたということについて、高い守秘義務もあり、それに見合ったお金がもらえるということです。

若い人が公認会計士を受験することの魅力について教えてください。

会計と監査は世の中で果たしている役割が非常に大きく、経済社会を支えるインフラとして、公共的で非常に重要な役割だということです。そのような仕事に就くということは、非常に大切でやりがいのあることです。長年の監査経験から言うと、クライアントと監査人の関係というのは、緊張した信頼関係、つまり、プロフェッショナルの誇り高い立場で、経営者とも会社とも対等に接しています。公認会計士として信頼される関係があってこそ監査が成り立ちます。公認会計士が署名する監査報告書は、数えられないほど多くの人の目に触れ、経済社会を支えています。この制度に是非プロフェッショナルとして関わってほしいと思います。

以上です。ありがとうございます。



編集後記

本企画は、今回が3回目となりました。皆様、信念を貫かれながら職業的専門家として第一線を走り続けられています。

公認会計士業界を取巻く環境の変化はめまぐるしく、この状況を乗り越えるには、先人がどのように歴史をつくりあげたかを学ぶ必要があります。

次号以降の先生方にもご期待ください。

日本公認会計士準会員会
実践躬行チーム一同

日本公認会計士協会
The Japanese Institute of Certified Public Accountants.

JIJA 日本公認会計士協会 準会員会
The Japanese Institute of Junior Accountants